

Kameda

2025.7 No.286

病院清掃を科学する

亀田メディカルセンターの理念

私たちは、全ての人々の幸福に貢献するために
愛の心を持って常に最高水準の医療を提供し続けます

最も尊ぶこと：患者さまのためにすべてを優先して貢献すること

最も尊ぶ財産：職員全員とその間をつなぐ信頼と尊敬

最も尊ぶ精神：固定観念にとらわれないチャレンジ精神

CONTENTS

亀田総合病院報
No.286
2025年7月号

3 巻頭言

4 かめナビ 病院清掃を科学する

12 看護の目 働くナースの日々の景色から

14 Close Up News

18 病院は誰かの仕事でできている

巻頭言

いのち輝く未来社会のデザイン

亀田総合病院 病院長 亀田俊明

この題名に見覚えのある方もいらっしゃるでしょう。これは今年4月から大阪市夢洲で開催されている「2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)」のメインテーマです。サブテーマとしては「Saving Lives(いのちを救う)」「Empowering Lives(いのちに力を与える)」「Connecting Lives(いのちをつなぐ)」が掲げられており、まさに医療界が取り組むべきテーマと同じで、とても親近感をおぼえます。

大阪万博をめぐってはネガティブな報道もありましたが、始まってみると、特に若い世代から高い評価を得ていることがわかりました。開催前に議論を尽くすのは必要なことですが、せっかく現在進行形で開催されている万博です。訪れたことのない異国の文化やグルメ、未来を創造する最先端の技術革新、まさに日本にしながら世界の今を楽しむことができるのですから、自分の目で見て体験しないのはもったいないと思います。

そして万博会場をより楽しむために必要となるのが公式アプリです。すでにディズニーランドなどのテーマパークでは、オンラインチケットやアトラクションの予約などアプリの活用は当たり前になっています。一度使ってみると最新情報も入手できて便利ですし、運営側にとっても効率化が図れます。国内では少子高齢化が進み、働き手の減少が深刻な課題となる中、業務の効率化は急

務といえます。DX(デジタルトランスフォーメーション)の推進は、もはや避けては通れない流れとなっています。

医療現場においても例外ではなく、今年度、当院では患者さまがよりスムーズに「初診外来→入院→退院→再診外来→近隣医療機関へのご紹介」といった一連の流れをたどれるような仕組みづくりに取り組んでいます。とはいえ、こうした取り組みは病院側の努力だけで実現させるのは難しく、患者さまのご協力は欠かせません。

現在、当院では「亀田INFO」という名称で、公式LINEによる情報配信を始めています。友だち登録者が増えることで、より多くの方にタイムリーかつ有益な情報をお届けできるようになりました。また、今後はLINEを入り口として、他のアプリケーションと連動させることで、患者さまの診療の流れをよりスムーズにしていく計画も進行中です。院内各所にQRコードを掲示していますので、ぜひ登録をお願いいたします。

万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」とは、サービスを提供する側と受ける側が協力しあいながら共に築いていくものだと考えています。病院と患者さまの双方にとって、より良い未来となるよう、今後ともご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

すべりにくい床、深呼吸できる清浄な空気、安心して手を添えられる手すり、感染症の不安がないトイレ——。これらすべては、清掃という営みによって守られています。病院清掃は、単なる美観の維持にとどまらず、医療の現場を陰から支える重要な仕事です。

今号では、そんな病院環境を支える環境整備課の松本忠男課長、内山美恵係長、そして山口未夏係長代理にお話を伺いました。

◆◆ 病院清掃とは何か

厚生労働省は「建築物における維持管理マニュアル」において、清掃を「人の健康を守る“衛生性”、人に快適さを与える“美観”、建築物の機能を長持ちさせる“保全性”、建築物各室の安全を確保する“安全性”の維持を目的とした維持管理業務」と定義しています。特に医療機関は、目に見えない菌やウイルスと日々向き合う現場だからこそ、清掃には高度な判断力と専門的な技術、そして的確なマネジメントが不可欠です。



しかし現実には、「誰にでもできそう」「裏方の仕事」といった先入観や思い込みが根強く残っており、現場で働くスタッフの専門性や、日々積み重ねている努力が正当に認識されているとはいえない状況です。スポットライトが当たる職業ではないから、その価値が可視化されにくく、専門職として認識・評価してもらえず、実際の現場で働く人の意識もあまり変わらない一面もあります。

「この仕事をしていることを人に話せない時期がありました。他業種の方と名刺交換をする際も、自分の仕事内容を語るのがいやだったんです」——そう語るのは、当院の環境整備課を率いる松本忠男課長。ベストセラー『健康になりたいければ家の掃除を変えなさい』をはじめ、著書は17冊以上にのぼり、テレビや雑誌などの各種メディアにもたびたび登場します。医療機関で培ったノウハウを家庭に落とし込み、健康や安全を守る清掃を提唱する、“掃除のプロフェッショナル”として業界内でも注目される存在です。

◆◆ 清掃を管理する

自身の仕事を「病院清掃のマネジメント」と表現する松本課長。この考え方の背景には、39年前入社した、病院清掃に特化した株式会社ダスキンヘルスケアでの経験があるといえます。

当時は、今以上に医療現場において清掃の重要性が正しく理解されていない時代。感染対策という視点も浸透しておらず、清掃が医療安全の一翼を担うという認識はほとんどなかったといえます。そんな時代に、ダスキンヘルスケアがアメリカから導入した「理論的・科学的根拠に基づいた清掃」は、清掃業界にとってまさに“黒船”のような衝撃をもたらしました。

同社では、いわゆる現場作業を行う清掃員とは異なり、清掃の設計と管理を担う「マネージャー」として院内を丁寧に巡視し、どこにどのような汚れが生じやすいか、汚れの種類やリスクレベルはどうかといった情報を分析。その上で、最も効果的かつ効率的な清掃方法を立案し、清掃スタッフのみならず病院全体を巻き込んで共有・徹底させる役割でした。

亀田総合病院で働く今でもその姿勢は変わっておらず、現場を自分の足でまわり、実際に目で見て、肌で感じることを大切にしており、昨年、一昨年だけでも病院内を巡って気づいた点、改善のアイデア、関係者との会話内容などを記録した「亀田」と表紙に書かれたノートは、すでに4冊を超えたといえます。



◆◆ 無駄が多い!? 清掃の現場

ダスキンヘルスケア在籍時、当時から医療業界の中でも先進的な取り組みを行っていた亀田総合病院を担当することになった松本課長。現場で業務を重ねる中で、その仕事ぶりや清掃に対する考え方が評価され、やがて病院側からのオファーを受けて、外部業者の立場から一転、グループ会社の社員として迎え入れられることとなりました。清掃体制の基礎を一から築き上げ、亀田クリニックの立ち上げをはじめとする数々のプロジェクトにも深く関わりながら、亀田の環境整備を支えてきました。その後は退職して独立し、清掃の専門家として幅広い分野で活躍。そして2023年4月、再び亀田からの要請を受け、まずは外部コンサルタントとして、のちに正職員というかたちで、27年ぶりに亀田へ戻ってきました。

長い年月を経て戻ってきた病院で、松本課長がもっとも大きな変化として感じたのが、「医療現場の働き手不足」です。かつては医療機関のどの部署も人手に比較的余裕がありました。そのような状況下でも一貫して持ち続けていたのが、「病院清掃には無駄が多いのではないか」という強い問題意識です。施設清掃は面積に応じて料金が発生するというビジネスモデルのため、隅々まで掃除することが推奨される構造がありました。しかし、現場を熟知する立場として「汚れは均一には発生しない」ことを経験的に知っていました。たとえば廊下は中央よりも壁際や隅に埃がたまりやすく、人が多く行き交う場所でも、意外と汚れていないということもあります。

どこが汚れているのかを見極め、そこに人や資材を集中させる。「清掃の最適化」という考え方は、長年松本課長が訴え続けてきたものです。しかしながら、「なぜそこまで考える必要があるのか」といった声も根強く、“なんとなく掃除”が習慣化している現場では、理解や共感を得ることはほとんどなかったといえます。

◆◆ 見えないリスクを取り除く

「なぜ掃除をするのか?」と問われれば、多くの人が「汚れがあるから」「きれいにするため」といった答えを思い浮かべるかもしれません。実際、清掃は長年、目に見える「汚れ」を取り除く行為として認識されてきました。しかし松本課長は、それだけで

は清掃の本質に届かないと考えています。「見える汚れを取り除くだけではなく、見えないリスクを未然に防ぐ行為であり、医療の質や患者の安全にも直結する行動」という確固たる自信があるからです。

たとえば「感染症を防ぐ」「アレルギーの症状を引き起こさない」など、清掃には明確な“成果”を伴うべき目的があります。清掃は目的達成の手段であるべきで、ただのルーティンワークでは意味を持ちません。その目的に応じて、もっとも効率的で効果的な手法を逆算して選ぶ——それが松本課長の提唱する、清掃のマネジメントの基本的な考え方です。とりあえずやる清掃ではなく、目的から逆算して作業を設計すれば、作業はむしろ効率化され、成果も明確に表れると強調します。

◆◆ 掃除から“環境整備”へ

2024年12月、亀田総合病院に新たに「環境整備課」が立ち上がりました。経営陣との対話を重ねる中で、当初は「清掃課」という名称で新設する案が検討されていました。しかし、松本課長は一步踏み込んで、あえて名称を「環境整備課」にしてほしいと提案しました。

なぜ「清掃」ではなく「環境整備」なのか。その問いに対して、松本課長は自身の愛読書でもあるフローレンス・ナイチンゲールの著書『看護覚え書(Notes on Nursing)』を引き合いに出します。環境整備は本来、看護師の重要な仕事のひとつであり、近代看護の母と称されるナイチンゲールも、病室環境を整えることによって患者の自然治癒力を引き出し回復を促す重要性を説いていました。

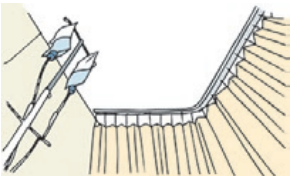
現代においても病室の換気、床やベッド周辺の清潔保持、音や光の管理など、安心して療養できる空間づくりは、医療の質に直結する要素です。「清掃」が“汚れを取り除く行為”だとすれば、「環境整備」は“汚れや不快の原因を作らない仕組み”をデザインすること。美観を整えるだけでなく、患者の回復を支え、職員の働きやすさを高め、ひいては医療の安全性や効率性にも寄与する。「環境整備課」という名称にこだわる背景には、こうした看護の原点に立ち返り、また清掃スタッフにも医療従事者の一人として誇りをもってほしいという思いが込められています。



✦ マニュアルよりも、患者目線で

人手不足が深刻化する今、マニュアル通りの清掃をすべて実施しようとすれば、膨大な人手とコストが必要となり、現実的には立ち行かなくなります。だからこそ「患者さまの視点に立つ」という発想が必要で、「誰のために、何のために清掃をしているのか」を常に念頭に置くことで、必要な場所に必要の手を入れ、無駄を省いた清掃の質の向上が図れると考えています。

たとえば病室では、清掃スタッフは立った状態で床や棚、設備まわりを中心に作業を行いますが、患者さまの目線はまったく異なります。多くの時間をベッド上で過ごすため、「日常の景色」は天井や壁、カーテンレールの上など、清掃者からは死角となりやすい箇所です。もし天井にシミなどがあれば、いくら床がピカピカでも清潔だと感じることはできません。



汚れというのは、常に同じ場所に、同じパターンで発生するわけではありません。その日の天候、利用状況、職員や患者さまの動きなど、さまざまな要因によって変化します。だからこそ、現場の状況を自分の目で確かめ、考え、そして判断する力、いわば「考える清掃」が求められているのです。

✦ AI時代の掃除術

現在、松本課長が力を入れているのが、AI(人工知能)を活用した世界初の清掃マネジメントの構築です。これまで40年近くにわたり積み重ねてきた現場での経験、観察、ノウハウをもとに、AIの力を融合させることで、これまで人間の勘や経験に頼っていた「清掃の質」を、データに基づく確かな判断で体系化しようとしています。「どこが、どの程度汚れているのか」「どこにどれだけ人手や資材を投入すべきか」といった判断を可視化し、最小限の労力で最大限の効果を生む清掃システムの実現を目指しています。

実際に現在進行中のプロジェクトのひとつが、病院内の汚れをスマホで写真撮影することで“データ化”するという試みです。撮影された画像データをAIが分析し、汚れの重さや清掃のしづらさ、汚れやすさや人の動きなどの要因と照らし合わせながら、

汚れやすい場所や時間帯の傾向を把握。経験と勘によって支えられていた清掃計画を、データとロジックで、より合理的かつ効果的な清掃スケジュールが構築可能になると期待されます。

とはいえ、「人が好き」という松本課長は、AIやお掃除ロボットが清掃スタッフの代わりになるとは考えていません。たとえば、AIには天井にたまったホコリや汚れを検知することはできませんが、患者さまの不安げな表情や、廊下の張りつめた空気を感じ取って、誰かのために一步踏み出すような“気づき”は、やはり人間にしかできない仕事と言えます。

✦ そして世界へ！

松本課長は2019年から、日本国内だけでなく中国の国営病院でも清掃マネジメントのコンサルタントとして活躍しています。最初に現地を訪れた際、病院のトップから「まずは地域でいちばんの病院にしてほしい。次は中国でいちばんに」と言われたそうです。壮大なビジョンに対し、松本課長は「次は“世界一”かな」と内心思ったそうですが、その直後、意外な言葉が続きました。「その次は、日本レベルにしてほしい」。このひと言は、松本課長にとって印象深いものでした。日本の医療機関が国際的にどれほど高い衛生基準を維持しているか、あらためてその価値を実感させられたといいます。

現在も松本課長は、850床規模(年内には1,500床への拡大を予定)という巨大な国営病院を定期的に訪問し、現地の状況に応じた清掃マネジメントの指導を行っています。意外なことに、その対象は清掃スタッフではなく、看護師たちです。というのも、「まずは看護師に標準的な清掃手順を身につけてもらい、委託業者のスタッフを正しく評価・指導できるようにする」という考え方が、病院経営層の中で強く支持されているからです。

松本課長は、中国での清掃文化の特徴を「とにかく水を使うことが大好き」と表現します。たっぷりと水を床に撒き、それを大型の扇風機で乾かすという方法が医療機関でも今なお広く行われています。しかしこのやり方では、ほこりや汚れが空中に舞い上がりやすく、床が濡れて滑りやすくなるため決して安全とは言えません。さらに、清掃の手順も極めて大まかで、最初のうちは一つ一つ説明しながら改

善する必要がある、文化の違いに戸惑う場面も多かったといいます。

それでも、何よりも心強く感じたのは、現地スタッフの学ぶ姿勢でした。言葉や習慣の壁はあっても、「良い環境をつくりたい」「患者にとって安心な病院にしたい」という思いは共通しています。講義のたびに熱心にメモを取り、質問を繰り返すスタッフの姿に、現場の変化への強い可能性を見出しています。



中国で指導を行う松本課長

✦ 亀田から世界へ

松本課長は現在も中国の病院で「環境を整えることで命と健康を守る」活動を続けています。しかし見据えるゴールは、そこにとどまりません。「いずれは、世界中にこの取り組みを広げていきたい。特別ではなく、“あたりまえの文化”として、誰もが無理なく、自然に取り組めるようにしたいのです」と語ります。

そして、その中心となるのは、ここ亀田総合病院です。高い医療技術や患者中心のケアで知られる亀田ならば、国内だけでなく、世界に向けて積極的に情報発信を行えると信じているからです。

また、こうした考え方は、医療機関だけにとどまらず、いずれは一般家庭へも広がることを期待しています。近年、地球温暖化の影響もあり、湿度と気温が高くなりやすい気候が続いています。カビやダニが家庭内で繁殖しやすい環境になったことが、アレルギー症状が増加する一因になっているのではないかと強く感じています。

こうした困りごとに対しても、「掃除のマネジメント」という視点を持つことで、「なぜ、どこを、どのように、そして負担なく」掃除するのかを考える習慣こそが、人の健康を守る第一歩になると信じているのです。

そして何より、こうした活動が、亀田の環境整備課で働くスタッフたち自身の誇りにつながればと、松本課長は願っています。「亀田で働く環境整備課のスタッフは、ただ掃除をしているだけの人たちではありません。人の命と健康を守る環境をつくる、れっきとした専門職です」。その言葉には、清掃という仕事に対する深い敬意と、仲間への揺るぎない信頼が込められていました。

今年の11月あたりの亀田ニュースで、松本課長のご家庭でできる掃除の連載を開始予定です。おたのしみに！



✦ Kタワーの清掃を担うRA部門

亀田総合病院のRA(ルームアテンダント)チームは、Kタワーにおける清掃業務を一手に担っています。Kタワーには、快適性を重視した一般個室のほか、2階の手術室、HCU(高度治療室)、霊安室、感染症対応が可能な陰圧室、さらには特床室(特別個室)といった、極めて多様な医療エリアが存在しています。それぞれのエリアごとに清掃に求められる基準や対応も異なり、スタッフには高度な判断力と柔軟な対応力が求められます。

特に一般個室については、ホテルライクな設えが特徴で、各部屋にはシャワー・トイレが完備されているほか、患者さまの快適な療養を支えるための各種アメニティや備品が整えられています。そのため、単に床を掃除する、ゴミを回収するだけではなく、備品の補充や設備の確認、ベッドメイキングなど、清掃以上のホスピタリティが求められます。

現在、RAチームはリーダーの山口未夏係長代理を入れ30名。そのうち7名は、ベトナムから来日した外国人技能実習生です。多文化・多言語環境の中でも協力し合いながら、日々の業務を支えています。祝日を除き、毎日およそ25名のスタッフが交代で勤務し、Kタワー全体のフロアを担当。病室は基本的に女性スタッフが二人





一組でまわるように配置されており、男性スタッフは手術室などを中心に担当しています。

こうした性別による役割分担の背景には、患者さま、とくに女性の入院患者さまへの配慮があります。療養中は、パジャマ姿であったり、すっぴんで過ごしていたりと、普段とは異なる状態にあることが多く、「他人に見られたくない」と感じる方も少なくありません。そうした気持ちに寄り添い、安心して過ごしていただけるようにという考えから、病室は基本的に女性スタッフが担当するという体制が整えられています。



息のあった山口さんとRAの皆さん

◆◆ 新幹線と病院清掃の共通点

患者さまが入院している間、一般個室の本格的な清掃は原則として行えません。そのため、退院後から次の患者さまが入院するまでの、わずかな時間がRAチームにとっての勝負どころとなります。当院は急性期病院であるため、在院日数が比較的短く、患者さまの入れ替わりも激しいのが特徴。そのような環境では、清掃に割ける時間はごくわずかです。

その姿は、まるで終点に着いた新幹線が、数分間で一気に座席の清掃・整備を済ませ、次の出発に備えるようなもの。RAたちも、短時間のうちに部屋全体はもちろん、シンクやトイレ・シャワーといった水回りを徹底的に清掃し、アメニティや備品の補充を行います。目指すのは、次の患者さまが「安心・安全・快適」と思えるような、清潔で整った療養空間を整えること。

退院患者さまが多い日は、こうした業務が一気に集中しますが、だからといって通常の清掃業務、たとえば共用トイレや廊下、エレベーターホールなどの清掃をおろそかにするわけにはいきません。限られた人手と時間の中で、どう効率的に動き、どこに優先的に力を注ぐか——そうした現場の判断には、松本課長による“清掃のマネジメント”が大いに役立っているといいます。

しかし、どんなに作業を効率化しても、結局は時

間と体力との戦いになります。だからこそ、RAチームではメンバー同士が声をかけ合い、ときには「先にトイレ片づけておくよ」「あっちの部屋、タオルが足りないからお願い」といった具合に助け合いながら、チーム全体で乗り切っていきます。

もちろん、大変なことばかりではありません。RAの仕事の魅力の一つは、患者さまと直接言葉を交わせる機会があること。「いつもきれいにしていたいただいてありがとう」といった感謝の言葉は、慌ただしい一日の疲れを軽くしてくれる瞬間です。

◆◆ 国際化する現場

清掃業は、現在多くの業界が直面している人手不足の中でも、特にその影響を強く受けている分野のひとつかもしれません。仕事内容が「地味」「体力的に厳しそう」といったイメージを持たれがちなうえ、明確なキャリアパスやロールモデルが見えにくいと感じる方も少なくありません。さらに待遇面や社会的な評価に対する不安もあり、若い世代からはどうしても敬遠されやすいという現実があります。実際、山口さんも「お若いのに清掃のお仕事をされているんですね」と声をかけられることがあるといいます。

近年、RAチームの中でも存在感を増しているのが、ベトナムから来日した外国人技能実習生たちです。彼女たちのまじめで前向きな姿勢は、チーム全体に良い影響を与えています。ただし、やはり最初の壁になるのが言語の問題です。日本での勤務が長くなるにつれて日常会話程度は問題なくこなせるようになりますが、入ったばかりの頃は専門用語や指示の細かいニュアンスが伝わりにくく、意思疎通に苦労することも少なくありません。身振り手振りのジェスチャーに加え、スマートフォンの翻訳アプリを活用したり、ときには他部署の職員に通訳を依頼することもあります。それでも、一緒に現場を回る中で少しずつ言葉を覚え、作業の意味を理解し、笑顔が増えていく過程を見ることは、チームにとっても大きな喜びです。



◆◆ 感染症の最前線で

新型コロナウイルス感染症が猛威をふるった時期、亀田総合病院KタワーのHCUは、日本でも最初に対応の最前線となりました。HCU内は厳格にレッドゾーン(感染リスク区域)に区分けされ、立ち入りには厳しい制限と高度な感染対策が求められました。そんな中でも、清掃の手を止めることはできません。命と隣り合わせの現場で、RAチームは日々その使命を果たしていました。

「やはり最初は不安でした」と、山口さんは当時を振り返ります。テレビやインターネットで連日報道される過酷な医療現場の映像を目にするたび、恐怖や緊張を感じたといいます。しかし、感染管理室による丁寧なレクチャーや、防護服をはじめとしたPPE(個人用防護具)の正しい着脱法の指導を受けるうちに、「正しい知識を持ち、決められた手順を守って行動すれば、感染症にかかることはない」という安心感が少しずつ生まれていったそうです。

また、ICN(感染管理認定看護師)の古谷直子さんをはじめ、感染管理の専門スタッフたち、病棟師長が寄り添い、困ったときにはすぐに相談に乗ってくれたことも、心の支えとなりました。「どんな小さな不安でも聞いてもらえる環境があったことが、本当にありがたかった」と山口さんは振り返ります。コロナ禍という未曾有の状況のなかでも、現場の清掃を止めなかったRAチームの姿は、まさに“もう一つの最前線”で医療を支え続けた存在です。

◆◆ お掃除の魅力とは

Kタワーには昨年6月にクリニック棟と共にお掃除ロボットを導入しました。一度スイッチを入れれば休まずに床のごみやほこりを吸ってくれる姿を見るたび「未来だな」と感じるといいます。しかし「やはり人間でないとできないこともまだまだ多い」とも山口さんは感じたといいます。たとえば棚や手すりの拭き掃除、水回りの清掃、細かな備品の整理整頓などは、どうしても人の目と手を必要とする作業です。患者さまの体調や様子に合わせて、静かに、時には声をかけながら清掃するような配慮も、ロボットにはできません。「AIの時代が到来しても、人にしかできない仕事は必ず残ります」。そう語る山口さんは、清掃の仕事が“人に寄り添う仕事”であることを、日々の現場で実感しています。

「快適な空間で、患者さまに安心してお過ごしいただきたい」という思いは、病院で働くすべてのスタッフに共通する願いです。清掃スタッフもまた、その大切な一翼を担っています。だからこそ、こうした記事を通じて「清掃って、実はすごく重要で、誇れる仕事なんだ」と若い世代の方々に興味を持ってもらえることを、山口さんは心から願っているそうです。

◆◆ ハウスキーピング(HK)とは

内山美恵係長が率いるHK部門は、Kタワーを除く亀田総合病院全体の環境整備を担うチームです。院内には複数の機能を持つ建物が点在しており、その総面積は一般の方が想像する以上に広大です。HKはこの広範囲にわたる施設の清掃・環境維持を、外部業者と連携しながら日々行っています。HKが直接管理・清掃を行っているのは、A棟、S棟、G棟、そして亀田クリニック棟の一部といった、病院機能の中核をなす主要施設です。

亀田クリニック棟では、日中は患者さまが療養する6階を、夜間には比較的人の出入りが少ないフロアを対象に清掃を実施するなど、利用状況に応じて時間帯を分ける工夫がされています。一方で、B棟、E棟、スタッフ専用エリア、亀田リハビリテーション病院、C棟、夜間の亀田クリニックの清掃業務については、信頼できる外部委託業者が担っており、HKはその業務全体を統括・管理する立場として、品質の安定と連携体制の維持に力を注いでいます。

RAが「患者さま一人ひとりの療養環境を整える、病室担当のスペシャリスト」であるのに対し、HKは「病院という巨大な施設の基盤を支えるチーム」として、広範な空間の衛生と安全を担保しています。HKとRA、両者が密に連携しながら、それぞれの専門性を発揮しているからこそ、亀田総合病



内山さん(中央)とスタッフ



院の高い清掃品質と環境レベルは維持されています。

◆◆ 光るベテランパワー

HKには現在、職員4名、パート19名、外国人技能実習生1名が在籍しています。パートスタッフの中に70歳以上の方も複数在籍しています。高齢化が進む社会の中で、まさに“シルバーパワー”が最前線の現場を支えているのです。しかし、病院清掃という仕事は、見た目以上に体力を要する仕事でもあります。中腰での作業、立ったままの移動、階段の上り下り、腰や関節に負担のかかる姿勢が続くなど、年齢を重ねたスタッフにとっては決して楽な仕事ではありません。

とりわけ、日々発生するおむつ類など水分を多く含んだ廃棄物の回収作業は、量も重さも想像以上で、肉体的には重労働にあたります。それでも現場で光るのは、ベテランならではの責任感と安定感。一人ひとりが自分の仕事に誇りを持ち、与えられた業務を丁寧にこなしていく姿勢が、清掃の品質を陰で支える大きな力になっています。彼女たちの存在が、まさに現場の屋台骨だと内山さんは言います。

◆◆ 柱となるシフト調整

多様なスタッフが協力し合う中、日々の清掃業務を成立させているのが、綿密なシフト調整です。パートが多く範囲の広いHKでは、スタッフの勤務時間や担当エリアはさまざまで、毎日の調整は職員3名が中心となって行っています。すべてのエリアを毎日清掃するのは現実的に難しいため“メリハリ”が大切です。特に患者さまが使用するエリアは最優先とし、職員専用スペースや使用頻度の低い場所は1日おきにするなど、柔軟に運用しています。

加えて、近年では外注業者の人員縮小を受け、亀田クリニックの夜間清掃は手上げをした事務職員15名ほどが参加し、現場の大きな力となっています。HK、RAの職員も週2回、17時から20時まで残って業務サポートや現場確認を行うなど、時間帯を問わない体制づくりが進められています。

こうした調整とあわせて、連携と工夫も清掃体制を支える柱となっています。たとえばA棟では、担当フロアを持たず、必要に応じて動く「フリースタッフ」制度を導入。通常業務外のニーズにも臨機応変

に対応できる体制を整えています。

それでもなお、人手不足という課題は日々の大きな悩みの種となっています。限られた人数で、広大な院内の清掃を維持していくためには、工夫と助け合いが欠かせません。現在、退院後の清掃については、看護部の協力を得ています。病院全体で“清潔で安心な環境”を守る——その思いを共有するからこそ、こうした連携が成立しているといえます。

そんな状況の中、職員たちが意識的に取り組んでいるのが、朝や昼のわずかな時間を活用したコミュニケーションです。パートさんたちが「行ってきます」と言い、職員が「今日もよろしくお願いします」と声をかける——その何気ないやりとりが、働く人たちにとって安心感やモチベーションにつながればとの思いを込めています。

◆◆ 理解ある上司の存在

かつての清掃部門では、管理職が清掃部門だけではなく、たくさんの部門を抱えていたことで、なかなか現場の声が伝わりにくく、声を上げても具体的な動きにつながりにくいの悩みの種だったといいます。

しかし今は違います。松本課長が環境整備課に着任してから、現場の空気は大きく変わりました。松本課長は、清掃の現場を“医療の一端”として捉え、日々の業務にもしっかりと目を向けてくれます。さらに、看護部や感染管理部門、そして院長といった他部門との調整役も積極的に担っており、清掃スタッフが直面している課題を、現場任せにせず組織全体で共有・解決へ導いてくれます。「清掃を理解してくれる上司がいる」という安心感は、現場の大きな支えとなっています。

◆◆ 環境整備課となって

「人手不足を嘆くよりも、今いる人でどれだけ効率的にできるかが大切」24年間勤務を続けるベテランの内山さんはそう口にします。これまでに幾度となく人員の変動や体制の変更を経験してきましたが、どんな状況でも現場を止めない柔軟さと、清掃への確かな信念を持ち続けています。

内山さんの思いは、松本課長が掲げる「限られた人手で最大限の成果を出す」という清掃マネジメントと同じです。また効率を追求する一方で、内山さ

んが大切にしているのは「ただきれいにする」ことではなく、「患者さまにとって気持ちのよい空間」をつくること。それには以前エレベーターから下りた管理者の「ここは空気がいいね」という何気ない一言が印象に残っているといえます。

掃除機のかけ方ひとつで、空間に漂うほこりや空気の質が変わることもあります。わずかなホコリが残るだけで「気持ちがよい」とはなりません。だからこそ、見える汚れだけでなく、空気感にも気を配る。それが、患者さまの体調や気分になんとも良い影響を与えられたらという、さりげない“おもてなし”の気持ちなのです。

◆◆ “花びら”プロジェクトの裏側

環境整備課では新たな取り組みとして、ゴミをひとつ、汚れをひとつふきすごとに、幹の描かれたポスターに花びらのシールを貼る「花びら一枚運動」を行っています。ゴミ拾いにとどまらず、例えば廊下の手すりを一拭き、床を一掃き、エレベーターの鏡をさっと磨く——そんな日常の中で“つい後回しにされがち”な場所にも、意識的に目を向けることを目的としています。

この取り組みが広がるにつれて、今ではスタッフが制服のポケットにクロスと手袋を常備するようになりました。「汚れに気づいたら、その場ですぐ拭く」。そうした姿勢が自然と根つきつつあります。

花びらという“見える形”で行動が可視化されたことで、スタッフの間にも「私もやってみようかな」「あ、ここもちょっときれいにしておこう」といった前向きな連鎖が生まれました。小さな行動の積み重ねが、結果的に病院全体の空気を清潔で心地よいものに変えている手応えを、多くのスタッフが感じ始めています。次はもっと大きなイラストに挑戦を始めるといえます。



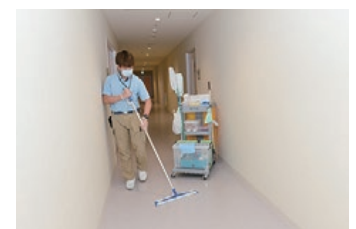
◆◆ そのひと拭きが、大きな力に

HKの仕事には、嘔吐や尿漏れといった突発的な事案への対応が日常的に含まれます。感染症を広げないためにも、迅速かつ適切な処理が求められるため、スタッフは常に「呼ばれたらすぐ動く」体制で現場に臨んでいます。しかし、敷地が広い亀田では、その“すぐ”が簡単ではないのが現実です。

たとえば、「トイレトペーパーが切れている」と呼ばれて、急いで亀田クリニックまで走ったところ、実際には備蓄は十分にあったものの、ホルダーにセットされていなかっただけという場面も。忙しいので無理ありませんが、「ほんのひと手間ご協力いただければ、この移動時間を別の清掃に充てられたのに…」と感じることもあるといえます。

逆に、少しだけでも協力してもらえる場面では、スタッフの負担も心も軽くなるといえます。たとえば、誰かがこぼしてしまった飲み物を、サッとひと拭きしてもらえるだけで、そのあとの清掃は格段に楽になります。誰かがごみをまとめておいたり、さっと一拭きしてくれるだけでも、「本当に助かる」と内山さん。

「清潔な環境」は、清掃スタッフだけがつくるものではありません。働くすべての人が少しずつ手を添えることで、はじめて保たれるものです。病院で働く一人ひとりにこうした思いが届けば良いと思いました。



看護の目

患者さまを通じて学んだ 看護師としての在り方

看護部 鈴木 茜



看護師になり、5か月が経とうとしています。毎日、様々な患者さまと関わり、たくさんのことを学ばせていただいています。その中でも、心に残り忘れられない患者さまが一人います。

この患者さまは、乳がんの転移が脳や肺にあり入院された方でした。夜勤の際にお部屋に伺った時、大河ドラマの話で盛り上がり、その後日勤で2回ほど受け持ちをさせていただいたことのある方でした。

受け持ち2回目の日、点滴を変えるためお部屋に伺うと、不意に「鈴木さんは今、何歳なの?」と聞かれました。「22歳になります。今年の4月に入職したばかりです」と答えると、患者さまは「じゃあ、色々なことに挑戦できるのね。私は、若いときいろいろなことをしてきたのよ。だから、もうがんになったのは運命だと思って、スッと死にたいのよ。さっき、旦那にそれを言ったら、ケンカになっちゃった」と苦笑いされていました。

私は、まさか自分にそのようなことを言われるとは思っておらず、自分が感じたことを素直に「旦那様はAさんのことが大好きなんですね。Aさんが死にたいって言うのと寂しくなって、強く言ってしまうのかもしれないですね」と答えました。すると、なかなか返事が返って来ず、余計なことを言ってしまったかとも思い患者さまの顔を見ると静かに涙を

流していました。私は、このタイミングで涙を流されるとは思っていませんでした。どうしたら良いのか、どのような言葉をかけたら良いのか頭の中で模索したが、言葉が出てこず背中をさすることしかできませんでした。

しばらくさすっていると、ご家族とケンカをしてしまったこと、死に対する思いを話しはじめました。私は、「そうなんですね」と聞くことしかできませんでした。聞くだけで良いのかとても悩ましい思いでした。すると、「忙しいのに話を聞いてくれてありがとう。少し、すっきりした。今、言ったことは内緒ね」と微笑まれました。少しでも力になれたことを嬉しく思う反面、忙しくしていることを患者さまに感じ取られてしまっていたのかと申し訳ない気持ちになりました。

私は、この時の対応が適切だったのか、励ます声掛けをした方が良かったのか今でも考える時があります。受け持ち人数が増え、慣れない業務の中で全ての患者さまの話をゆっくり聞くことは難しいかもしれませんが、身体的侵襲がかかる手術をすることやこれからの治療に不安を抱えている人は気兼ねなく相談、質問できる身近な存在は看護師なのではないかと考えます。言葉では、「大丈夫です」と言っている患者さまでも、心の中では不安を持って

いて本当は話を聞いてほしいと思っているかもしれません。表情や声色など、非言語的な部分にも目を配り、「何かあったら遠慮なく言ってくださいね」のひと言が患者さまを安心させるかもしれません。このような何気ない一言をかけていけるようになりたいと思いました。また、自分の仕事や表情などで忙しそうに思わせてしまっていることを知り、落ち着

いて行動していくようにしたいとも思います。不慣れな部分もあり、先輩方から学ばせていただくこともたくさんあります。しかし、患者さまからは一人の看護師としてみられており、この人なら相談できそうと思っていただけるように行動していくようにしたいと思います。

患者さまの声を聴くということ

看護部 現 A3 師長 大久保宏美



Kタワー5階は乳腺科・形成外科を主科とした外科病棟で、様々な科の手術に対応しています。私も鈴木さんと同じように、「こんな話で引き留めて、忙しいのにごめんなさいね」と患者さまから言われ、そのように感じさせてしまったことを申し訳ないと感じたことがあります。

入院される患者さまは、様々な不安や辛さを抱えています。私たち看護師は、患者さまがその思いを表出できるような関係を日々の関わりを通して築き、共感し寄り添うことが役割の一つだと考えます。

今回鈴木さんは、患者さまの死に対する思いを

聴き、自分なりの言葉で共感を伝えたことで寄り添う看護が出来たのだと思います。また、「死に対する思い」という話しばらく話をしてもらえたことは、それまでの鈴木さんの関わりが患者さまに寄り添えていたからこそだと思っています。そして、この関わりから自分の普段の関わりを振り返り、具体的に自分が今後できることは何かを考えられたことが、なにより自分自身の学びになったと思います。これからも、患者さまの思いに寄り添えるような関わりを継続し、成長に繋げてもらいたいと思います。

CLOSE UP NEWS

クローズアップニュース

2025年度 医師初期研修

本年度臨床研修課程の初期研修医として第39期生24名が採用され、38期生24名とあわせて48名が臨床研修をスタートさせました。

各医師の氏名は次の通り。(敬称略)

《1年次生》

○亀田初期研修プログラム

- ・香取 真奈(国際医療福祉大学)
- ・佐藤 友宏(聖マリアンナ医科大学)
- ・城田 紗英(東北大学)
- ・秦野 結菜(筑波大学)
- ・田島 望美(浜松医科大学)
- ・丹羽 雄哉(東京科学大学)
- ・長谷川 あかね(金沢大学)

- ・八木 喜貴(信州大学)
- ・横山 永佳(秋田大学)
- ・岩部 愛子(埼玉医科大学)
- ・大石 樹(東京慈恵会医科大学)
- ・大津 隆太郎(北里大学)
- ・加藤 佳瑞弘(千葉大学)
- ・橋本 健(日本医科大学)
- ・林 真優子(東京科学大学)
- ・目良 義也(藤田医科大学)

○亀田小児科産婦人科プログラム

- ・伊藤 大成(岩手医科大学)

- ・太田 諭(岩手医科大学)

- ・堀内 沙也花(信州大学)

- ・松尾 洋佑(東北大学)

○地域ジェネラリストプログラム

- ・永福 大暉(滋賀医科大学)
- ・芹澤 将(杏林大学)
- ・寺西 奈保美(東京慈恵会医科大学)
- ・三嶋 世人(東邦大学)

《2年次生》

○亀田初期研修プログラム

- ・石川 菜々子(現 東京科学大学)
- ・緒志 涼路(琉球大学)
- ・茂田 治樹(東北大学)
- ・曾我部 拓(慶應義塾大学)
- ・中島 弘(現 東京科学大学)
- ・花田 剛郎(順天堂大学)
- ・福田 仙一(岐阜大学)
- ・松原 京平(新潟大学)
- ・尾方 優香(北里大学)

- ・松原 京平(新潟大学)

- ・尾方 優香(北里大学)

- ・洪 永鎮(奈良県立医科大学)

- ・矢代 順哉(兵庫医科大学)

- ・山田 賢汰(東邦大学)

- ・東 珠莉(横浜国立大学)

- ・江崎 康将(慶應義塾大学)

- ・川部 大志(東海大学)

- ・坂元 太郎(長崎大学)

○亀田小児科産婦人科プログラム

- ・大川 雄生(三重大学)
- ・尾仲 穰(京都府立医科大学)
- ・加藤 乃愛(現 東京科学大学)
- ・加藤 優(昭和大学)

○地域ジェネラリストプログラム

- ・大畑 温嗣(島根大学)
- ・金森 真穂(東海大学)
- ・松本 佳大(北里大学)
- ・八木 有紗(昭和大学)



2025年度 歯科医師臨床研修



歯科医師卒後研修室では、研修歯科医として第29期生の5名が採用され、辞令交付が行われました。(敬称略)

- ・大内 愛梨紗(東京歯科大学)
- ・宇津木 真凜(明海大学)
- ・直正 千香子(北海道医療大学)
- ・船登 勇輝(昭和大学)
- ・吉積 由里子(日本大学)

カイゼン・アワード2025 表彰者決定 今年の“大賞”は該当なし

2024年度の改善提案を表彰する「カイゼン・アワード2025」の選考結果がこのほど発表され、全83件の提案の中から、部門ごとに優れた取り組みが表彰されました。

今回、最も注目された「大賞」は、残念ながら該当なしという結果に。カイゼンアワード事務局を務める山本喜美夫副センター長(周術期管理センター)は、「良い改善は多くみられたが、法人全体、事業所全体に適応したカイゼン提案が今回は見られず、大賞は該当なしとさせていただいた。ただし、全体として提案の質が確実に向上していることは

感じており、どの提案も第1回目の開催時からには想像できなかったレベルに達している。これらの取り組みが、新たなチャレンジを通じて法人全体の変革につながっていくことを願っています」と講評しました。

一方で、各事業所の院長賞や特別賞には、業務の効率化、患者サービスの向上、デジタルツールの活用など、多様な視点からの提案が並び、現場の課題に即した実践的な工夫が高く評価されました。



「亀田カイゼン・アワード2025」の受賞提案は以下のとおり(敬称略)

【大賞(理事長賞)】

(該当なし)

【経営管理本部本部長賞】

代 表 者	大野 真紀(循環器7剤通減対策合同チーム)
提 案 名	7剤通減:事前対応で毎月100万円以上通減額を改善させた道のり

【医療管理本部本部長賞】

代 表 者	在間 望美(かめバス導入合同チーム)
提 案 名	院内初のかめバス:循環器アブレーション・CAG・PCIのかめバス導入による収益性向上と業務改善

【情報管理本部本部長賞】

代 表 者	宮崎 紀子(診療支援課)
提 案 名	プリビレッジ(診療権限付与)フローの改善～オンライン化と担当のチーム制～

【亀田総合病院院長賞】

【亀田ファミリークリニック館山院長賞】(ダブル受賞)

代 表 者	碓井 朋海(B6業務カイゼンチーム)
提 案 名	「前残業0」を目指した看護DX導入と、業務の見直し

【亀田クリニック院長賞】

代 表 者	畔田 明子(NOBORI Web予約班)
提 案 名	亀田クリニック、外来Web予約はじめました

【亀田リハビリテーション病院院長賞】

代 表 者	落合 恵子(亀田リハビリテーション病院事務室)
提 案 名	スキャナ取り込み行程の変更による業務の軽減とカラー印刷の削減

【亀田京橋クリニック院長賞】

代 表 者	川名 葵(京橋ドック内視鏡管理チーム)
提 案 名	売上向上を支えた「胃内視鏡検診」戦略—多職種連携とデータ分析が導いた検診管理の最適化—



【幕張クリニック院長賞】

代 表 者	小倉 直子(ALL MAKUHARI)
提 案 名	クリニックを挙げて会議体を構築し、より多くの方に受診して頂けることを目指して躍進中!

【亀田MTGクリニック院長賞】

代 表 者	佐藤 妃乙美(チーム協会)
提 案 名	生活習慣病予防健診における胃部検査の当日キャンセル抑止について

【亀田IVFクリニック幕張院長賞】

代 表 者	大杉 幹(スマートワーク推進チーム)
提 案 名	システム導入による業務効率化と業務負担軽減の取り組み

【亀田森の里病院院長賞】

代 表 者	荻野 仁史(麻酔科)
提 案 名	麻酔科術前外来でのエコーの活用

【亀田浜荻クリニック院長賞】

代 表 者	西山 新治(亀田浜荻クリニック リハビリテーション室)
提 案 名	ChatGPTとITツールを活用した効率化とミス削減

【業務改善特別賞】

代 表 者	横山泰昭(薬剤部 製剤科)
提 案 名	「院内製剤集」reboot:Microsoft Lists を用いたデータベースの構築と帳票自動出力環境整備

【動画活用特別賞】

(該当なし)

病理を体験する 市民公開講座を開催

5月24日(土)、東京スクエアガーデン内中央区立環境情報センター研修室にて、病理医による一般市民向け公開講座「がん細胞をデジタル顕微鏡でのぞいてみようーがんを理解するー」が開催され、15名が参加しました。主催は、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 情報病理学講座、亀田総合病院 臨床病理科、(社)日本デジタルパソロジー研究会(JSDP)。

今回の講座は、医療の現場でも普段はなかなか病理との接点のない一般の方々に向けた啓発活動の一環として企画されたもので、病理診断の基礎と最先端の技術について分かりやすく伝えるため実施されました。

冒頭では、JSDP会長・前田一郎先生(北里大学北里研究所病院病理診断科 教授)が乳がんを題材に、病理診断とは何か、病理医の役割、そして細胞診について、ユーモアを交えながら親しみやすく解説しました。続いて、小野哲先生(静岡県立静岡がんセンター 呼吸器内科 医長)によるビデオ講演では、臨床の現場におけるデジタルパソロジーと人工知能(AI)の実際の活用について、臨床医の視点からの紹介がありました。

講座後半では、当院臨床病理科の福岡順也特任包括部長(長崎大学 医学部 情報病理学講座教授兼任)



が登壇。参加者全員のスマートフォンにデジタルスライドを共有し、がん細胞の観察を行いました。腫瘍浸潤リンパ球の役割、リンパ管への侵潤と転移のメカニズム、断端の評価といった病理診断を行う病理医の視点を、スライドを動かしながら解説するというインタラクティブな試みが行われました。さらに、AIがどのように病理診断を理解するかを示すため、会場ではChatGPTを実際に操作しながらのデモンストレーションも行われ、参加者の関心を集めました。

福岡医師は「どの程度まで患者さまや市民の方に病理診断のアウトラインを理解してもらい、重要性を伝えられるかを試してみたい気持ちがありました。講座は好評のうちに終了し、今後の継続に向けた手応えを得る機会となりました」とコメントしています。病理という専門領域の社会的認知をデジタルデバイスを使って高める第一歩として、今回の講座が貴重な機会となりました。

亀田森の里病院 健康フェスティバル開催！

6月1日(日)、亀田森の里病院および隣接する若宮公園にて「森の里健康フェスティバル」が開催されました。当日は天候にも恵まれ、219名の来場者でにぎわいました。

院内では、認知症看護認定看護師によるミニレクチャーや、フットケア外来のデモンストレーションが行われたほか、握力・血流・骨密度などの健康チェックや、お薬・お食事の個別相談にも多くの方が参加。足の測定や歩行年齢の測定(てんとう虫テ

スト)も人気を集めました。

また、歯科検診や睡眠時の耐圧分散体験、キッチンカーの出店などもあり、健康について「知って、測って、楽しんで」学べるイベントとなりました。

若宮公園の野外ステージでは、清流睦太鼓の迫力ある演奏を皮切りに、吹奏楽団「Symphonic Do」による華やかなステージ、そして午後には医療職バンド「ジャスティンスタッフ」による演奏などが行われ、会場は笑顔に包まれました。

亀田森の里病院長に就任した亀田奈々医師は、「肩や腰が痛いなど、何かお困りのことがあれば気軽におかかりいただきたい。皆様の声を取り入れてよりよい病院にしていきたい」と挨拶し、来場者からも「病院の雰囲気があって安心した」「楽しく健康について学べた」といった声が寄せられました。



6年ぶりの調べ 「初夏の音楽会」開催

5月10日(土)、Kタワー1階ロビーにて、職員有志を中心としたTeam KAMEDA 音楽部によるコンサート「初夏の音楽会」が開催されました。音楽部は医師をはじめ、看護師や技師、事務職など多職種の職員で構成されており、それぞれが仕事の合間や休日に時間を見つけては練習を重ねてこの日に臨みました。

音楽部の演奏会は、以前は定期開催され、病院の日常にささやかな彩りを添えるイベントとして親しまれていました。しかし、新型コロナウイルス感染症流行の影響により、長らく開催が叶わず、今回の公演は実に6年ぶりとなりました。今回ようやく再開することができ、関係者にとっても感慨深い演奏会となりました。

当日は、軽快なリズムが心地よい木管・打楽器アンサンブル「アンダー・ザ・シー」で華やかに幕を開け、その後もジャズトリオによる「Moanin'」、ピアノ独奏の「エチュード」、ギター弾き語り「ハナミズキ」、金管アンサンブルによる「金管八重奏のための文明開化の鐘」、そして弦楽アンサンブルの「カノン」

など、ジャンルも編成も異なる多彩なプログラムが披露されました。合計31名の演奏者が、日々の業務とはまた異なる表情で、心を込めた演奏を届けました。

会場には、入院中の患者さまやお見舞いに訪れたご家族、また通りがかった職員など、次第に多くの方々が足を止めて音楽に耳を傾け、ロビー全体が優しい音色に包まれました。

終演後にはアンコールの拍手が自然と湧き起こり、出演者たちも笑顔で応えながら、大盛況のうちに「初夏の音楽会」は幕を閉じました。



**LINE公式アカウント
亀田INFOの友だち登録を
お願いします**

2025年1月から亀田総合病院LINE公式アカウント「亀田INFO」を開設しました。病院にお越しいただく皆さまにとって役に立つ、タイムリーな情報をLINEで直接お届けいたします。

亀田INFOでできること

- 診療担当表の確認
- お問い合わせ BOT(ロボット)の活用
- 交通アクセスや駐車場情報
- お薬番号の確認
- 広報誌の閲覧
- 病院からのお知らせ配信(原則1日・15日)

登録方法

- 1 QRコードを読み取ってください



病院報バック
ナンバーも
らくらく閲覧

病院は 誰かの仕事で できている



組織データ

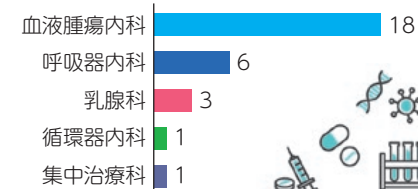


治験管理センター長
舟越亮寛 薬剤管理部長

- 院内CRC 5名
(うち日本臨床薬理学会認定CRC 3名)
- 外部CRC 常勤 4名
(うち日本SMO協会公認 CRC 1名)
※ 5月末で1名異動
- 事務員 1名

計 10名

当院の治験実施件数(件)



「やりがい」「仕事の魅力」「大変なこと」

患者さまが元気になる場に立ち会える…

当院の治験は、基本加療中の患者さま対象のため、効果を承認前に見ることができないのは、勉強になるし感動すると嶋津由美子副主任は言います。長く治療をつづけ、最後の望みをかけてトライした治験薬で寛解する奇跡のような現場に立ち会った経験もあり、「だから続けて来れた」とも。



患者さまに寄り添いながら仕事ができる…

治験の最終目標は、厚生労働省から治験薬を承認してもらうことにあります。そのため治験に参加される方は決められたスケジュールで来院し検査等を受けていただく必要があります。患者さまの環境や年齢層は人それぞれです。個々の事情に合わせて相談しながら治験を進めるのがCRCの大切な役目です。

また、治験薬という事で不安を感じる方もいますから、安心していただけるような説明を行うのも大事な役割です。栗原悠一さんは、治験に参加する方にとってわからないことは何でも相談できる一番身近な存在でありたい。患者さまの本音が聞けることがうれしいと教えてくれました。



新薬開発に関われる…

従来品と似たような新薬であっても、治験によって薬剤の選択肢が増えることは重要ですから、治験薬が承認されたときには苦労が報われると、センター開設当初から亀田の治験を見守ってきた寺田浩美主任。

大変と感ずること…

重篤な有害事象の発生時など、最初に対応するCRCは、24時間以内に治験依頼者に報告しなければなりません。ふだん静かなオフィスが慌ただしくなる状況はとても緊張するとのこと。

大きく変化してきた事務業務

(株)EPLinkの事務局支援と、DDTSといった治験文書を電子原本としてクラウドに保管する機能をベースに、製薬企業との電子文書授受や院内ワークフロー、IRB管理などの治験業務の効率化を支援するためのシステムが導入されたことで、事務業務はかなり楽になったと増田和恵さん。銀行員からの転職で一人で事務全般を担うため、ここ数年エクセルなどのPC業務の腕をあげるためアビバで学び続けていて、今はフォトショップで写真加工を学んでいるとのこと。まさに継続は力なり。



増田家の猫「しげる」。首をかしげることから娘さんが命名



取材を終えて

治験を行うスタッフのほとんどは医療系の資格を持ち、業務に精通しています。看護師経験を持つCRCのひとり、ワーキングホリデーでオセアニアに渡り、スキューバダイビングのインストラクターやバリスタとして働き、帰国後CRCになりました。また、臨床検査技師から転身した栗原さんは「検査結果をもっと早く出す方が、治験患者さまにとってはどれほど助かることか…」と思ったそうです。一方で、ある人は病気で仕事ができなくなってしまう人たちが

見て、医療に携わりたいと一念発起してCRCの世界に飛び込みました。

皆これまでやってきた仕事を別の角度から見ることで感じた「小さな気づき」を大切にしています。こうした小さな疑問や気づきが、自分たちの働き方を改善したり、患者さまや社会にとって快適な療養環境を生み出すことにつながれば良いなあと感じました。



治験管理センターのお仕事

世の中にはさまざまな病気があり、多くの患者さまが新しい治療薬を待ち望んでいます。しかし、どんなに素晴らしい薬が見つかったとしても、すぐに治療に活かせるわけではありません。適切な量や投与の仕方、副作用など安全性を確認する必要があります。そんな新薬候補の有効性や安全性を調べる最終段階の試験が「治験」です。治験は健康な人や患者さまの協力のもとで実施され、治験の結果を厚生労働省に申請し、承認されたものが「新薬」として患者さまのもとに届けられます。

当院の治験管理センターは、1999年4月に設置されました。治験黎明期から携わってきた寺田浩美主任は、治験コーディネーターClinical Research Coordinator (CRC)として25年のキャリアを積んできました。

最初2名ではじまった治験は、2023年から株式会社EPLink(治験事務局業務、CRC業務)に一部業務委託し、派遣スタッフを含めて10名の大所帯となり、「今後のニーズを考えたこの事務棟オフィスもすっかり手狭になった」と感慨深げでした。



CRCとは

驚くことに、治験コーディネーターになるために資格はいりません。しかし医学や薬学、医療システムに関する知識と理解が欠かせないため、医療系の国家資格を持っている人や病院勤務経験のある人が優遇される傾向にあるそうです。そこで当院のCRCにベースとなる職種を聞いてみたところ、9名のうち薬剤師2名、看護師4名、臨床検査技師1名、管理栄養士1名、一般職1名と、思いのほかバラエティに富んでいました。

★どのような経緯でCRCとなったのか？

2人目の出産を契機に看護師から夜勤のない職種を希望した嶋津由美子副主任。38年間臨床検査ひと筋で来たため、別の視点から臨床業務をみてみたくなった栗原悠一さん。また、お子さんがスポーツをやっていた関係で働き方を緩めたかった清田周子さんは、当院の薬剤部のパートや、老人ホームなど薬剤師として様々な働き方を経験し、CRCに戻って来たそうです。女性がライフステージに合わせて働き方を選ぶのはちょっとうらやましく感じました。



★どんな人におすすめですか？

CRCは、製薬会社の臨床開発モニター(CRA)、治験を実施する診療科の医師、薬剤部はもとより看護部、臨床検査部、医事課などの各部署と協力して治験を進め、被験者との良好な関係を築く必要があります。当然いろいろなタイプの人との人間関係をスムーズに構築できるかどうか「カギ」を握るとも言えますから、コミュニケーションスキルは欠かせません。そのほかとしては、

- ・めげない人
- ・ストレスに強い人
- ・細かいことが得意な人
- ・デスクワークが好きな人
- ・英語が苦にならない人

看護師からCRCになった嶋津副主任は、治験中CRCは患者さまに一番近い存在になるため、じっくり関わることができるのも魅力のひとつ。以前よりも一人ひとりの患者さまと向き合っサポートできるようになったそうです。

また、昔と違ってきたのは、治験期間が長くなってきたと寺田主任。投与期間が1年間などと決められたものもありますが、治験が有効であれば5年間とか、抗がん剤だと9年間という例もあるとのこと。

亀田総合病院報

No.286

亀田ホームページ <https://www.kameda.com>

2025年7月1日発行（隔月発行） 発行責任者：亀田隆明 編集：広報企画室

発行：医療法人鉄蕉会 〒296-8602 千葉県鴨川市栗町 929

当広報誌は個人情報保護のもと本人の了承を得て作成しており、本用途以外の転用は固くお断りしております。

All articles on this PR magazine has been printed under the permission of the subscriber to protect their personal information.

All editorial content and graphics may not be copied without the permission of Kameda Medical Center, Public Relations which reserves all rights.

